

新羅僧道説に就て

今 西 龍

(要目)。緒言。道説傳研究史料。十訓要と道説。道説贈諡の次第。崔惟濟の道説碑記。編年通錄の記事。慧徹大師事蹟道説事蹟に混入す。一行禪師と道説。無俗卿先覺大師事蹟道説事蹟に混入す。僧理窟、僧烟氣等道説に混す。全南諸寺其開基を道説に偽託す。道説國師賞録の妄誕。十訓要は偽作なり。結論。

新羅末より高麗朝を通じ李朝を経て今日に至るまで其間千年に亘りて最も多く半島上下士庶の思想を律し行動を支配せしものを識緯風水説なりとせば其宗祖と仰がるゝ道説の傳は攻究の價値あるものなるべし。道説は高麗朝にありては實に其建國の神祕的要素を成せし聖僧にして李朝末に至るまで半島永劫の命數の豫言者たると共に國家の盛衰の係ると信ぜられし地理學の宗祖なりき。李朝建國の神祕的要素を成すと彼の高麗朝に於けるに似たる懶翁無學の師

弟も彼に踵きて起れるものにして彼に依らずんば彼等は重きをなしうるものにあらず。斯の如き道説の傳は斯の如き僧人の例にもれず後世の附會假作に覆はれ其眞躰を没し混亂紛雜せりと雖道説はかの神誌仙人の如き烏有の人物にあらず實在の人なり。而して半島の思想界を支配せし道説は眞の道説にあらずして此等附會假作の衣冠を纏ひし道説なるが故に道説の研究には彼の眞身と共に此等をも研究せざるべからざるべし。小生四五年前に道説傳を國學院雜誌に載せしことあり今日にして之を讀めば實に淺薄にして愧汗に堪へざるが故に其後學び得しものを以て更に本稿を作り以て道説傳成立の史的順序の考證を試みるとすと雖亦不完全淺薄のものゝみ更に他日修正の期あるべし。

道説傳研究に用ひし史料次の如し。

(1) 高麗太祖「十訓要」。或は「信書」と稱す。高麗史卷二太祖王二十六年癸卯の條に載す。

(2) 『玉龍寺王師道説加封先覺國師敎書及官階』。高麗仁宗李熙王

(1123—1146 A.D.)の時崔應清、王命を奉じて撰す。「東文選」に載す。

(3)『白雞山玉龍寺贈諡先覺國師碑銘並序』。高麗毅宗王四年(1150 A.D.)崔惟清、王命を奉じて撰す。東文選に載す。此碑は全羅道玉龍寺に建てしものなれど今存せざるが如し。

(4)『綱年通録』。高麗毅宗王の時金寬毅が諸家の文字を集めて編成せし高麗の史籍なり。其書今傳らざるが如し。高麗史卷一に引用す。

(5)『東國輿地勝覽』。殊に全羅道の條。

(6)『朝鮮寺刹史料』。道説に關する記事數多あり。内につきて月出山道解寺所傳『道説國師實錄』は國師傳中比較的近世のものにして最も詳密なり。此實錄には英宗王十九年癸亥(1736 A.D.)重刊とあり。朝鮮書籍の例より推考するに其初刊はそれより五十年を溯らざるべし。關野博士嘗て其寫本を將來せられたることあり。「朝鮮寺刹史料」につきては余既に佛教史學に紹介せり。

(7)『智異山華嚴寺事蹟』

(8)『高麗國故無爲解寺先覺大師通光靈塔碑銘並序』。開運三年丙午(946 A.D.)全羅道康津縣月出山に立てられしものにして崔彦鶴の撰文なり。海東金石苑卷三に收む。彦鶴は高麗史列傳によれば開運元年に卒せり。金石苑は之を考證して、是碑先撰於貞明四年、而刻於開運三年也。刻碑後於撰碑時二十八年、或因貞明四年正高麗得國之始、末及上石、後補刻耳」といへり。貞明の頃は高麗は既に水軍の勢力を以て海を超て遂に全羅南岸を領有せしも尙ほ

此地に建碑の事は容易にあらざりしなるべきを以て金石苑の説據當なり尙ほ本論中に述ぶることあるべし。

(9)『唐高麗大安寺廣慈大師碑記』。全羅道谷城縣桐裏山にあり。高麗光宗王二年(931 A.D.)建立。金石苑に收む。

(10)『宋高僧傳』。『景德傳燈錄』其他。

(11)『龍飛御天歌』。李朝世宗王二十七年(1455 A.D.)鄭麟趾等王命を奉じて撰し後二年崔恒等其音解註釋を作れる李氏興起の盛徳を頌せる書なり。現存の刊本は孝宗王十九年校書館刊行本なり。

道説の名の最も古く見ゆるは高麗太祖の『十訓要』なり。此訓要は高麗太祖王二十六年癸卯四月即ち薨去の前月に大匡朴述希を召して親授せられ『嗣王相傳爲寶』と傳へられ實に高麗朝五百年間の政教の基礎を爲ししものと一般に信ぜらるゝものなり。但し高麗の李齊賢の忠憲王世家には太祖王二十年に信書十條を出すべしとあり今高麗史に従ふ。

其第一條に

我國家大業、必資諸佛護衛之力、故創禪教寺院、差遣住持梵脩使、各治其業、後世姦臣執政、徇僧請謁、各業寺社、爭相換奪、切宜禁之、

其第二條に、

諸寺院皆道詵推占山水順逆而開創、道詵云、各所占定外妄加創造、則損薄地德、祚業不永、略中
新羅之末競造浮屠、衰損地德、以底於亡、可不戒哉、

とあり。此十訓要は今日に至るまで一人の疑を起ししものあるを聞かずと雖小生は道詵傳研究の結果終に之を虚偽の作物と認むるに至れり。其證明は之を本篇の終りに於て爲すを便なりと考ふるが故に須らく後にゆづるべし。

次に高麗仁宗王(1123—1146 A.D.)が道詵に先覺國師の諡を加封せしときの教書及官詔には道詵と高麗王室との關係を書せり。其教書中には、

玉龍寺王師道詵、應時出世、助順降衷、發揮佛祖之風、主張宗教、扶立帝王之業、雅契先知、啓聖期之方輿、開寰宇而肇造、玄功所被、永世不忘、顯廟以禪師而追崇、肅宗加王師之貴號、名傳不朽、新開貞石之文、禮極尊稱、寅奉先王

之憲、畧中今賜玉龍寺先覺國師告身一通云々、

とし其官詔中には

王師某(道詵)生有大心、世稱法器、尋妙源於性海、不滯空門、得真印於禪林、自達妙義、竊妙既極於佛祖、緒餘益精於陰陽、秘術將傳、忽有異人之來謁、六通不碍、妙觀大地而靡遺、知時革政之有期、必是愛命者崛起、遂指先祖之室、指謂當出聖人、實封一卷之書、預進未生君子、期以興起之日、

とあり。此兩文によれば道詵は顯宗王(1010—1031 A.D.)の時禪師號の追崇を受け肅宗王(1096—1105 A.D.)の代に王師の貴號を加へられ更に仁宗王の時に至り先覺國師の諡等を贈られたり。而して其高麗王室に對する功勞としては太祖の出世を預知し此未生君子に一卷の秘書を預進せりといふにあり。是れ道詵が此當時に於て高麗建國の神秘的要素を成す神僧たりしものにして此事は毅宗王(1147—1070 A.

D.)の代に成りし金寛毅の編年通録に、

世祖居松嶽舊第有年、又欲創新第於其南、即延慶宮奉元殿基也、時桐裏山祖師道詵入唐、得一
行地理法而還、登白頭山、至鶴嶺、見世祖新構
第曰、種察之地何種麻耶、言訖而去、夫人聞而
以告、世祖倒屣追之、及見如舊識、遂與登鶴嶺、
究山水之脈、上觀天文、下察時教、中曰、明年
必生聖子、宜名曰王建、因作實封、題其外云、
謹奉書百拜獻書于未來統合三韓之主大原君主足
下、時唐僖宗乾符三年四月也、世祖從其言築室
以居、是歲成肅(世祖の諡)有娠、生太祖、

と記せり。稗麻につきては李齊賢の樂翁神説に稱之與王方言相類と解釋せり。

此高麗王室との關係は崔惟清の碑記にも載せたるより考ふれば此時代に存ぜし所傳にして當時一般に信ぜられたりしものなるべし。而して之を編年通録の他諸記事によりて考ふるに此高麗の前期は實に高麗朝の盛時にして佛教の流行せる上に所謂中華崇拜

の文士輩出して彼の邊境の一武人より起りし太祖王建の家門を神聖にし天命の君主と致すがために荒唐無稽の妄談を作成せし時代なれば道詵と高麗王室との此記事の如きも大地を妙觀して遺す靡しと傳稱せられて當時世の尊崇と畏敬を受け居りし道詵をかりて此間に高麗王室の創建に神秘的要素を附加せしものたるべく然り而して既に道詵を以て王室の神僧となせし以上は益々之をして神聖ならしめ益々崇敬を加へざるべからず是れ顯宗の時に禪師號を肅宗の時に王師號を贈られたるに更に茲に至りて先覺國師の貴號を贈られたる所以なり。之を他の一方より見れば禪師より王師に王師より國師に進みし道詵の贈號は圖讖風水説の勢力増進の一標準點なり。

高麗定宗王が圖讖を以て西京平壤に移都せんとせしと高麗史王四年の條に見ゆ。顯宗王また圖讖を崇奉せしとは高麗史王の二十一年の條に「内史侍郎普含祥卒、含祥治術數、每遇國家有事、輒質何圖讖、遂至大用、昨議輕之」とあるにて知るべし。文宗王十年に諸臣に命じて十精曆七曆曆見行曆道甲曆太一曆を撰ばしめ來

歳の文祥を讓ひ(高麗史本紀)道詵の松岳明堂記の文によりて長源亭を西江餅嶽の南に作らしめ(東國通鑑卷十七)。肅宗王の時金謂碑は道詵によりて高麗三京説を奏し南京を建置するに至れり(高麗史本紀王七年の條及び列傳第三十五金謂碑傳)。睿宗王元年には陰陽地理諸家の書を刪定して海東秘録を編し(高麗史)二年には西京遷都の議を上る者あり(東國通鑑)。終に道詵の地脉表旺説より遷都の大問題となり仁宗王十年西京の叛亂となれり。圖讖説は此王の時隆盛の頂に達せしならむ(其後たりとも衰へたりといふにあらず)。是より先睿宗王の時高麗に使せし宋の徐競は宣和奉使其高麗圖經に見聞を記して「高麗素知書、明道理拘忌陰陽之説、故其建國必相其形勢可爲長久計者、然後宅之云々」と記せりこれ實に高麗一代の風なり。

道詵に先覺國師を贈諡せし仁宗王に嗣ぎし毅宗王の四年(1150A.D.)に至り王は道詵終焉の地たる全羅道曦陽縣白鷄山玉龍寺に其碑を建てしめたり。時の學士崔惟清の撰文にして其文中に王命を記して「行蹟至今尙未文傳之、仁考既命汝以撰述」とあるに依れば彼の仁宗王の教書中に「新聞貞石之文」とあるは道詵に贈諡の時王は崔惟清に命じて其碑文を撰ばしめられし事にして間もなく其事中止し毅宗王に至り

又更始せしめられしが如し。而して「行蹟至今尙未文傳之」の語に依りて當時道詵の成文傳の世に流布するもの無かりしことを知るべし。崔惟清は新羅の孝恭王が道詵死後其門人瑛寂等の請を容れて瑞書學士朴仁範に命じて作らしめし碑文の石に鐫せざりしものによりて道詵の傳を立てこれに智異山下の異人の記事と王太祖出生の豫言とを附記せしもの、如し。惟清の撰文は東文選に載す。題して白鷄山玉龍寺贈諡先覺國師碑銘といふ。其大要次の如し。

上嗣位之四年十月、命臣某曰、惟先覺國師、道德茂盛、於國家、功業最深、我祖宗累加封贈、所以致崇極、之已備而、行蹟至今尙未文傳之、朕有惡焉、仁考既命汝以撰述、其敬之哉、臣聞命惶悸、退治其藁、得其實實之詳者、乃序次而紀之、師諱道詵、俗姓金氏、新羅國靈巖人也、或云、是太宗大王之庶孽孫也、母姜氏、夢人遺明珠一顆使吞之、遂娠、年十五、穎悟夙成、遂

祝髮肆月遊山華嚴寺、新羅文聖王八年、年二十矣、于時惠徹大師傳密印於西堂智藏禪師、開堂於桐裏山、遊方求益者多歸之、師樞衣請學、凡所謂無說之說、無法之法、虛中授受、廓爾超悟、年二十三、受具戒於穿道寺、或於雲峯山下穿洞安禪、或於大白岩前結茅坐夏、名稱普聞、寰海尊仰、道行所感、神奇之迹頗多、然非要者、不錄、曦陽縣白雞山有古寺、曰玉龍、師遊歷至止、愛其幽勝、有終焉之志、宴坐忘言三十五載、四方學徒雲集、獻康大王遣使奉迎、留止禁中、師每以玄言妙道、開發君心、未幾、不樂京輦、懇請還山、唐昭宗光化二年戊午三月十七日寂、享年七十二、四衆啼泣、遂遷坐立塔于寺之北岡、孝恭王贈諡曰空禪師、門人疎寂等俱先師之景行不傳、奉表乞爲紀述、王迺命瑞書學士朴仁範爲碑文、未鐫于石、始師之未卜玉龍也、於智異山甌嶺置庵止息、有異人來謁曰、弟子幽栖物外、

近數百歲矣、緣有小枝、可奉尊師他日於南海汀邊、當有所授、回忽不見、師奇之、尋往所期之處、果遇其人、聚沙爲山川順逆之勢脈之、顧見則其人已無矣、其地在今求禮縣、土人稱爲沙圃村云、師自是豁然、益研陰陽五行之術、雖金壇玉笈幽邃之訣、皆印在胸次、爾後新羅政教浸衰、有危亡之兆、師知將有聖人受命而特起者、因往遊松岳郡、時我世祖在郡、方築居第、師過其門曰、此地當出王者、但經始者未諧耳、適有青衣聞之、入白世祖、遽命出迎入、咨其謀、改營之、師因曰、更後二年必生貴子、於是撰一卷書實封之、進世祖曰、此書上未生君子、然須年至壯實而授之耳、是歲新羅獻康王立、唐乾符二年也、四年我太祖果誕降于前第、逮壯得其書觀之、於是知天命有所屬、……故顯王有大禪師之贈、肅祖加王者之號、我聖考恭考王追封爲先覺國師、今上又命刻碑以壽其傳、……於戲師之道、其詣於極者、與

佛祖合、寓於迹者、若張子房之受書於神釋、實誌之預言未兆、一行之精貫術數者耦歟、師所傳陰陽說數篇世多有之、後之言地理者皆宗焉、

今此碑記を見るに其高麗王家に關する後半の記事を除きては道詵の一生を傳すること常識的にして穩當眞率なり一の誇張も虚偽も加はず。思ふに材料を道詵の死後間もなく朴仁範が撰みし碑文に採りしものならむ。而して崔惟清の當時道詵に關して種々の神異談の作成せられ居りしこと明白なるも惟清が「道行所感神奇之迹頗多然非要者不錄」と記して之を顧みざりしは卓見といふべし。然れども道詵が地理風水説の神僧たりしといふこと、其高麗王太祖が受命の君として出づべきことを預言せしといふこと、の二説は實に道詵に對して高麗歴代尊崇の原因にしてまた此建碑の原因なるを以て惟清も之を録せざるべからず。而して此事件たるや素より新羅朴學士の撰文には誌さるべき性質のものにあらずして高麗朝

に於て道詵の所説と稱せらるゝ陰陽五行地理風水説が勢力を生じてより後に假作せられしこと及其假作は道詵に禪師號の追贈ありし顯宗王代を遡ること遠からざること昭乎とし明白なり。夫れ崇佛の盛なる高麗朝に於て高僧の位號を追贈されし者小なからず道詵にして太祖王當時より此説話を有せば禪師號の追贈豈に數十年を空過して顯宗王を俟たんや。

毅宗王の時に至りては道詵が王者の出生を豫言せしとの説に止まらず太祖王の壯時に太祖王に面謁せりとの説をなすものあるに至れり。高麗史高麗世系の條に註として引用せる閔漬の「編年」に

太祖年十七、道詵復至、請見曰、足下應百六之運、生於天府名墟、三季者生待君弘濟、因告以出師置陣利天時之法望我山川感通保佑之理、

とあり。但し増補文獻備考によれば閔漬の編年なるものには「世代編年節要」七卷と「本朝編年綱目」四十二卷との二種あり今其書を見ることを得ざるを以て

歴史の引用するは孰の編年なるが不明也と雖兩書共に先に挙げし金寛毅の編年通録の説を多く採れりとの事増補文獻備考 卷二百四十四なれば閱漬は高麗忠肅王時代の人なれど此説の作成は毅宗王頃にありとなすべしものなり。

金寛毅編年通録の此等道説に關する記事は一の「はなし」にすぎず。事件の性質已に史學の批判外のものなり。

高麗の名臣李齊賢が其著樸翁稗説につたへし金寛毅の説は高麗史の所傳と相違せり。曰く「寛毅又云、道説見世祖松嶽南第曰、種孫之田而種麻也、稌之與王方言相類、故太祖因姓王氏云々」とあり。李齊賢は此記事に對する自己の意見を附記して「父在而子改其姓、天下豈有是理乎、(中略)且太祖述世祖任弓裔、弓裔之多疑忌、太祖無故獨以王爲姓、豈非取禍之道乎、按王氏宗族記、國祖姓王氏、然則非太祖始姓王也、種孫之説不亦誣哉」と駁せり。尤も高麗の宗姓につきては李瀛(星湖)の僊説の中には「三世皆以建名、則王建之非姓王、而二字名可知、太祖之未生、道説已說與世祖曰、明年必生聖子、宜名王建、……王建之二字名尤明」と論ぜり。

尙高太祖の受命につきては三國史記弓裔傳中に唐南昌遺贈得

の靈鏡の映日文の記事あり(高麗史にも錄せり)。又崔致遠傳に維林黃葉鶴嶺青松之句を誌せり。三國史記は道説につきて一言の及ぶものなきは高麗刺葉の眞の古傳に道説の否なかりしがためなるべし。

道説が王氏興起の預言に關する傳説は已に顧るに足らざれども其入唐の有無は考究せざるべからず。

其入唐説は既に金寛毅の編年通録に「時桐裏山祖師道説入唐得一行地理法而還」とあること前に挙げし如くなるが龍飛御天歌も此説を採りて「道説三國未

術僧玉龍禪師也、入唐傳一行禪師相地之法而還」と記

し。第十六章の注。東國輿地勝覽には崔氏園の諺傳なりとて

「道説入唐傳一行禪師地理法而還」と誌せり。全羅道靈富郡

條の此等の書は皆道説が一行の地理法を傳得せりとのみ誌して其傳得を直接なりとは云はざるを後世の

書には道説は一行に師事せりと誌すに至れり。一例

を舉ぐれば三聖山三幕寺事蹟朝鮮寺刹史料所收には「道説入中

國、尋一行禪師、得其法而歸」とし「日封菴記」「全南順

天郡仙嚴寺事蹟」「黃海道鶴林寺事蹟誌」「釋王寺所

傳道説傳「道岬寺所傳一行禪師傳鉢錄」及び「傳鉢錄」の説を採りし「道説國師實錄」並に朝鮮寺刹史料に收む等以上李朝に成りし道説傳には道説と一行との間に直接師弟の關係ありとせり。然るに崔惟清撰の碑記には道説を讚美して一行に言及し乍ら其間に承繼ありとは誌さずして道説の師師を一異人なりと誌せること仁宗王時の官誥と同じ。然らば道説入唐の有無はいかにといふに一行と道説とは百年を距つる人なり後に詳説すべし兩者に師弟の關係あるべからざる事明了なり。林象徳は其著東史會綱に道説事蹟之疑と題して「按一行與張燕公同時、乃初唐人、道説乃唐末人、其授法一行之説蓋不足信」と論ぜり。然れども之を以て直に入唐の有無を斷定すること難し。編年通録も輿地勝覽も入唐して一行の説を傳得せりとのみ記するを以て一行と道説との時代の相違は道説の入唐を否定すること能はざるを以て年代以外によりて入唐の有無を論ぜざるべからず。夫れ僧侶の入唐は名譽にして其

履歷の上に華々しき光彩を加ふるものなるを以て道説が果して入唐せしならむには彼の贈諡の教書に誌さざるの理なし況んや其碑文に於てをや。然るに其に其記事なきより推せば入唐の事は無かりしと斷定せざるを得ず。碑文の如きは其居住を詳記して絶えて入唐の事を記せざるは入唐の事實無かりしを以てなり。道説入唐説の本源たる金寛毅は「桐裏山祖師道説入唐云々と配せり。此桐裏山祖師の語殊に注意すべし。桐裏山祖師は道説にあらずして彼の師惠徹大師なることは崔惟清の撰文にも「于時惠徹大師、傳密印於西堂智藏禪師、開堂於桐裏山、中畧道説櫛衣請學」とありて明白なり。朝鮮寺刹史料所收の泰安寺桐裏山泰安寺は全羅谷城にあり今泰安寺と書す懸板に「穀城桐裏之泰安則慧徹禪師親建於大唐天寶元年」とあり元寶元年説は疑あり又高麗光宗王光德二年庚戌(950 A.D.)に立てられし桐裏山大安寺廣慈大師碑海東金石苑所載には

□□法祖□西堂傳於□徹、徹傳於□先師、如如

傳於□、吾師即西□曾孫也。

とあり□徹が惠徹なること異論なかるべし。惠と慧と通ず。

桐裏山祖師は惠徹にして其入唐して印を西堂智藏

より傳へしことも亦異説なかるべくこれより云へば

道詵は智藏の法孫なり。

李朝の李暉光は芝峯類説に通度寺の舍利は昔智藏禪師自西域取來云と記

し智藏は道詵之師也と誌せり是れ慈藏を誤て智藏とし惠徹の師たる智藏を直に道詵の師とせるものにて其誤認明白なり

金寬毅は道詵を惠徹と混じて桐裏山祖師と誤認せ

り。惠徹入唐の事蹟は移りて道詵の事蹟となれり。

茲に於て道詵傳は惠徹傳を併合せり。

西堂智藏は宋高僧傳智禪篇第三に開元寺道一傳に附して傳あり。

これによれば元和九年八十八法臘五十五にして寂せり。惠徹は其門人にして景德傳燈錄に虔州西堂智藏法嗣として誌せる新羅國慧禪師とあるの彼なるべし。又宋高僧傳によれば一行は開元十五年に寂せり是歳は西堂智藏の生れし年にして其後百年を経て太和元年道詵新羅に生れたり是時智藏の死後十三年を經たり。道詵が惠徹に師事せしは年二十の時なりしを以て智藏の死後三十二年なりとす。惠徹も智藏晩年の弟子なるべし。

道詵の入唐の事は否定せりと雖これと同時に一行

の陰陽五行説を傳得せりとの説をも併せて否定する

こと能はざるなり。さりとて道詵が其師慧徹より之を傳得せし證據を發見すること能はず。凡ての方面

に探ぐるも一行と道詵との間に於ける學説の系統を

知ること能はず。當時唐新羅間の交通頻煩にして全

羅西南道詵の由生地なりと唐との航路は甚だ容易なり。李重煥の八城誌全

羅道の條を參考すべし。殊に道詵の生れし靈巖は實に此要地なり

しなり。唐に於ける地理陰陽説の流行は甚だしきも

のあり其影響の忽ち半島に及ぼししこと勿論にして

之を三國遺事に記する新羅佛教の狀態と開元貞元兩

釋教目錄高僧傳等によりと知らるゝ唐佛教の狀態と

を比較すれば宗教上新羅は實に唐の一地方たりしに

すぎず。道詵たるもの特に繼承するところなくとも

其周圍より得るところありしなるべし。一行は唐に

於ける地理陰陽の大家なり道詵また新羅に於て有數

の僧なりしを以て遂に兩者に身的連絡あるかの如く

傳ふるに至りしならむか。

惠徹禪師傳が道詭傳に併合されたる如く無爲岬先覺大師傳も亦道詭傳に併合せられしが如し。今之を論ずるに先ち此無爲岬先覺大師の如何なる僧なりしかを説かんとす。全羅道月出山無爲岬寺に高麗崔彦擣の撰みし先覺大師遍光露塔の碑ありて海東金石苑に收むることは既に之を誌せり。此碑文に高麗太祖

の諱たる建字も惠宗の諱たる武字も避けざるは其撰文が太祖の三韓統一未だ成らず制度も整はず避諱の禮制未だ定らざりし時の作文にして之を貞明四年に既に撰了せしを開運三年に不注意にも原文のまゝ鐫石せしものと解釋すべし。然らざれば原碑には闕畫せるを金石苑が復字せしものなるべし。唯文末に建立の年月を記せし一行には建字を避けて立字を用ゐたることは注意すべし。而して碑文中に「今爲武州□□人」とあるは太祖王二十三年に武州と改稱せし前の撰文たることを證するなり。太祖王二十三年に改稱せりとの事につきては東國文獻備考卷十に柳馨遠の否定説を載すと雖柳氏の説は考證不充分のために生ぜし誤論なり。今採らず。

海東金石苑が「梁貞明四年に撰碑の事ありて開運三年に刻せしなり」と考證せるは正確なり。此碑文字脱落多くして甚だ讀み難しと雖之を高麗史及三國遺事の記事と參照して推讀し大師の傳を作れば次の如し。

大師諱は迺微、俗姓崔氏、武州今の光州の人なり、母金氏、咸通五年新羅景文王四年四月十五日大師を誕生す。

大師出家の志あり許されて寶林に詣て體證禪師に謁し中和二年二十具戒を華嶺寺官壇に受け大順二

年入朝使唐への使節に託して入唐し道膺大師其傳宋高僧傳第十二に

りに學び禪教の奧を探り新羅に歸りて全羅道唐津の無爲岬寺に住待となれり。既にして半島擾亂し

全羅道は甄萱の據るところとなりしが新羅孝恭王十六年天福九年に王建は其主弓裔の命を奉じ水軍を

率ひて全羅道の西南錦城を伐ち其地方を奪て羅州と命名せり。此時大師は王建に招致されて北方高麗の本地に赴きしが如し。尙碑文を前後の關係よ

り推考すれば大師は新羅神徳王六年後梁貞明三年弓裔に殺されたるやに思はる。俗年五十四なり。其明年王建が弓裔を逐ひて王位に即くや先覺大師と諡し太安寺を建て崔彦搗碑文を撰し開運三年之を月出山無爲岬寺に立つ。

以上は碑文を主とし高麗史遺事等を參考して作りし先覺大師傳なるが先覺大師傳も無爲岬寺の來歴も明白なり。然るに東國輿地勝覽康津縣の條には

無爲寺在月出山、開運三年僧道誥所創、歲久頽毀、今重營因爲水陸社、

とあり。僧道微の諡も道誥の諡も共に先覺大師にして而も其寺道誥に緣故多き地方にあり道微先覺大師が道誥先覺大師に混ぜらるゝ事容易なり。無爲寺に道微先覺大師の碑の立ちし開運三年を以て勝覽は道誥先覺大師が此寺を立てたりとせり是歳は道誥の死後五十年なり。是れ勝覽は訛誤せる俗傳を誌せしものならむ。今無爲寺の碑文を讀みて道微の二字に注

意せずば常人には道誥の碑と讀まるべし。勝覽は此碑を道誥の碑とし其末行に開運三年中略立とあるを道誥が寺を立てたりと解釋せし杜撰極まる説を其まゝ採りしに似たり。大東金石書李朝宗室朝原君所碑に此碑を録して、

無爲碑、在康津月出山無爲寺羅僧道誥創寺碑、柳勳律書、崔彦搗文、石普出帝開運三年丙午立、麗定宗元年也、

とあり。道微碑の筆者は柳勳律にして撰者は崔彦搗其建立は開運三年なり。筆者を全うし撰者を同うし時と處を同うして別の二碑が立てらるゝ事は此場合に於て存在し得べからざる事實なり。道誥創寺碑と稱するものは其實道微先覺大師碑なり。大東金石書は之を其寺に於ても又世俗に於ても道誥碑と誤傳し居りしを其まゝ登錄せしこと明なり。之を誤認する以上は寺傳の先覺大師はやがて道誥傳となりて世に流布し道誥傳は道微傳を併合すべきなり。茲に於て

崔氏先覺大師の傳説地たるべきかと思はるゝ崔氏國の諺傳は道説先覺大師の物語となり道説は崔氏女の不由人道兒なりといふ一傳説を生ずるに至れり。輿地勝覽が「玉龍寺碑以詵母爲姜氏、此則稱崔氏、未知孰是、」と論ぜしはあまりに正直にすぎたり。而して三幕寺事蹟及び釋王寺道説傳の記する道説が麗太祖に知遇せられたりとの説が單に想像より出でしものなりとすれど論なければども若し之を多少の根據ある記述なりとすれば崔氏先覺大師傳が道説傳に併合せられて出來し傳説より出でしものなりと云ふこと不可なきに似たり。

尙ほ近世に至りて道説傳は僧理嚴傳をも混入せるが如し。輿地勝覽光陽縣玉龍寺の條に崔惟清撰文の彼の碑あることを記し其文を抄録し次に更に「又有金廷彦所撰僧理嚴碑」と記せり。即ち玉龍寺には其當時道説碑と理嚴碑と存在せしなり。理嚴碑文は未詳なれども金廷彦は普願寺三重大師塔銘の撰者に

して此塔銘より推せば高麗景宗王代(979—981 A.D.)の文士なるを以て此人にして道説の碑文を撰し而も其碑が玉龍寺に存ぜんには崔惟清撰の碑文中に「行蹟至今尙未文傳之」の語あるべきにあらざるに道岬寺道説國師實錄には道説の死せることを記し「文明大王賜諡洞真大師塔號寶雲令學士金廷彦撰碑」と述べ更に玉龍寺に道説の雙碑雙塔ありと誌せるは明に理嚴碑をも道説碑なりと誤認せしものなり。而して此誤認を敢てせる以上は理嚴の事蹟もまた道説事蹟に混入せることなしとは云ふべからず。智異山華嚴寺の創建者と傳へられし煙起の名も亦道説の別號なりと傳へらるゝに至れり。即ち道岬寺道説國師實錄に「蓋道説即師兒時名、而字光宗、法號慶寶、烟起其別號也、」と記せり。然るに輿地勝覽南原都護府佛字の條には

華嚴寺在智異山麓、僧煙氣不知何代人建此寺、中有一殿、四壁不以土塗、皆用青壁、刻華嚴經

於其上、歳久壁壞、文字刑没、不可讀、有石像
載母而立、俗云烟氣與其母化身之地、

と記し。康熙三十六年開刊の智異山華嚴寺事蹟には

吾華嚴寺、聞之古老、梵僧煙起之所建也、成而

毀、毀而成、不知其幾千年干茲、石壁經字十兆

九萬五千四十八言、碎爲足下之蘆、

と記し其建築物中には烟起寮三十間あること及び寺

北二十里 朝鮮の里數 般若峯に道誥窟烟起庵あることを録

せり。道誥窟と烟起庵とが全一峯上に在ることは道

誥と烟起とを稍々接近せしむと雖其別人なること明

白なり。尤も此華嚴寺事蹟の如きは此種縁起書の性

質として古傳を恣に改竄して輯録せるものなるを以

て信を措くに足らず。其證據顯然たる一例を擧ぐれ

ば此書に崔惟清撰の道誥碑文を抄録せる中に原本に

「其地在今求禮縣界」とある五字を改めて「其地在今

求禮縣華嚴寺之下、師夜宿華嚴、晝見沙勢、日々瞻書

秘録」の二十七字と成せるあり。斯の如き縁起書は

信ずること能はずと雖此寺が新羅中代に既に存在せ
しこと疑ふべからざるが如し。 抑も新羅華嚴寺には此智異山華嚴寺の外に華嚴佛國寺

あり月遊山華嚴寺あり史に華嚴寺と稱するもの多く佛國寺を指すが
如し月遊山は月出山即高麗の月生山と同一の山ならざるか未だ考な

し。道誥の別契せるは此月遊山華嚴寺なり。文科大學列品室に智異
山華嚴寺の彼の刻華嚴經青壁二片を保存す 關野博士の勤めに依り寺

より寄贈せし物なり之を見るに字劃稜隄なり(但し東國金石評
には無名氏華嚴經刻魯公體枯澁とあり) 新羅時代の作なるべし。

煙起 或作氣 と道誥とは混すべからず。然るに道誥國師
實録には

實録には

師之所在、或於溪澗巖藪間、薰火而坐、尋師著

必見烟起處而往、故以烟起祖師稱之、今興德之

烟起寺、即師之所創、而因師之號而名之、其他

淳昌之剛泉、綾州之開天、南平之佛會、雲興、

求禮之華嚴、燕谷、康津之淨水寺、南原之萬福

禪院等處稱以烟起祖師道場云者、皆師之所創、

而在他路者則不能盡記、

と記し諸寺を一網に道誥の下に拉し來れり。輿地勝

覽を按ずるに此書烟起、剛泉、佛會、雲興、淨水の

諸寺を録せずと雖開天、華嚴、萬福を録して而も道

詠が其創設者たることを記せず特に萬福の如きは高麗玄宗の創設せるものなることを明記せり。又道岬寺に就ては現今道詠と最も關係深き寺刹と視なされ道詠國師實錄には「朗州之月出山道岬寺、則詠師之所創也、道詠國師生於此州、長於此山、とあれど勝

覽には「道岬寺有月出山、道詠所嘗住也、有碑、字缺不可讀、寺下洞口有二立石、其一刻國長生三字、

其一刻皇長生三字」とあるのみなり。此道詠國師實錄は其奥書に英宗王十九年癸亥重刊とあるより推せば其作成年代はこれより五十年を溯り得べく肅宗王初年の初刊本なるべしと考へられ其書さまで新しきものにあらずして道詠傳の最も詳細なる書なれども其記事は虚偽のみを羅列せり現今道詠傳の最詳細なるものとして多少の勢力あるべき此書は杜撰を極めたる悪書なり根據なき妄説を輯めたる俗書なり。此書に道岬寺僧の記せる小冊子の説なりとて道詠を以て玄宗開元二十六年に生れ憲宗元和九年二月十日に

享年七十二にして寂せりとし崔惟清の碑文に光化元年に寂せりとあるを駁して「況光化則唐無年號者乎」と論ぜるが如きは愚昧の言探るに足らず又開元二十六年より元和九年までは六十九年なることにも心付かざりしものなりとす。

以上説きしものによりて高麗初期に於ては道詠の名聲は決して後世に於けるが如き大なるものにあざりし事明白なり。小生は高麗太祖の十訓要を以て高麗中世の偽作なりと信ず。十訓要第二條に「諸寺院皆道詠推占山水順逆而開創」とあるは或は半島の寺院悉皆につきて説くものと解するも或は太祖創設の寺院をのみ指すものと解するも共に事實に合はず。文宗王九年十月の王の制文を併せ考ふるときは太祖以後の諸王が太祖の訓要の言なるものに拘束されたるの形跡の無きことを知る。華嚴寺事蹟は第二條第八條とを混合して一ヶ條とし「車峴以南、公州江外、形勢背逆、人心亦然、諸寺院一從道詠占定、此外禁壇創造以致濫觴、」とせるがこれならばや、解し得べしとするも斯くては十訓

要また十訓要ならず「十訓之終、皆結中心藏之四字、」の語ある以上は其條項を加減し得べきものにあらざ。第四條第五條また疑ふべき點あり。此訓要は高麗の中頃に地理方伎者流の手に成りし僞物なるべし。

夫れ道説傳は崔惟清所撰の碑文を正確なりとす。

但し此碑文の記事と雖道説と高麗王室との關係の説話は高麗初期に假作されしものゝ如し。斯く彼が高麗建國の神秘的方面に結び付けらるゝや諸説の彼に附會せらるゝもの日に夥しく其名勢隆々として道説

の贈號は禪師より王師に王師より國師に進み高麗中代には神僧となり預言者となり他の高僧の事蹟を併合し其傳を増大し禪補寺塔なるもの構成せられ其所説と傳稱さるゝものは半島上下の畏敬を受け大勢力を振へり。然れども尙ほ高麗後期にありても佛僧としての道説の勢力中心が全羅南道の地を出でざりしことは僧一然が嶺南にありて記述せし三國遺事に地

理風水説流行の影は明に見へ乍ら道説の名の遂に出でざるによりても推知し得べし。高麗朝の時隆盛の極に達し内既に蝕蝕ありて腐朽せる佛教は李朝に入りて忽然推折して地に墜ちまた收拾すべからざるに至りしも既に高麗時代より佛教とは流を異にする傾向ありし地理陰陽説は少しも衰退することなく其説の中心人物たる道説は尙ほ神僧として畏敬せられ禪補佛塔は全半島に充ち其説は半島貴賤の胸底に拔き難き信仰の根を保持して存在せり。

禪補寺塔説は地理説の一部なり。其説に曰く國家の禍亂は國土山川の疾病に因るを以て之を治療するには人體に病ある時血脉を尋ねて針灸を下すが如く山川の或る地點に鍼灸を施すべし其鍼灸は寺塔を建立するにありと。此佛寺を禪補寺塔と稱す。或は曰く人の性は山川の氣に感ずる者なり其心其勢山川と相類せざるはなし半島の山川は凶峻なり故にカ韓となり三韓となり國土分裂の禍あり是れ山川の疾病なり之を治療するには塔寺を以て艾とし之を灸すべし地勢の缺者は寺を以て補ふべしと此寺を禪補寺塔とす。又曰く朝鮮の山川は行舟の勢なり孤舟風に飄うて大海にあり毋を失して依なきの形なるが故に朝鮮には分裂の禍あり之を療治するには石佛像を作りて之を鎮し、佛宇を立て揖帆とすべしと。道説此秘

説を一行禪師に得て歸國し高麗太祖に説き太祖之を用いて裨補寺院を立て(十訓要第二條の如く)終に半島の統一を保持するを得たるを以て若し此裨補を破れば國破れ民死し國土分裂の禍あるべしと信ぜらる。(朝鮮寺刹史料に收むる釋王寺高麗國師道說傳無荷子鶴林寺蹟白雲山內院寺事蹟曹溪山仙岩寺事蹟等に記するものを見るべし)龍飛御天歌第七章の註に高麗用道說之説、推占山川順逆、開創寺社、禁人私自創造以損地德、名之裨補所、とあり。以て裨補の義を知るべし。獨り裨補寺塔説のみならず地理說風水説圖讖等凡て道說所説と稱せらるるもの半島を害毒すること甚し。李朝にありて此説を排斥せしもの實に魚孝瞻一人あるのみ。

斯くの如き李朝時代にありては佛寺の存在の意義なるものは之を政治上より見るも社會上より見るも唯此裨補寺刹たるにあるのみされば太宗王之即位の初めには書雲觀の上書を採用して道說の密記に付せざる京の中外の諸寺を革せしことあり(御天歌第百七章)。宣祖王以後に至り僧侶は更に僧將僧兵とし換言すれば常備の擔夫的軍人足として政治的に存在の意義を名のみながらも保有し得たりと雖其實は佛政衰頹の最後の墜落なり。此時勢にありて道說に附會し得る全

羅南道の諸寺院は其創設を彼に歸し其裨補なる名稱の蔭に餘喘を保たんとせり。茲に於て前朝諸高僧の將に湮滅せんとして其影もうすらぎし傳説遺物遺蹟は道說に奪はれ道說に假托せられ道說事蹟なるものは益々増大し異説を生じ矛盾を作し今日の奇怪なる形影を成すに至れり。所謂道說傳説なるものは全南の一隅に起り全南を包覆し其影を全半島に投ぐるに至りし一大妖雲なり。而して地理圖讖家たる彼は全半島を風靡し支配するに至りしと雖寺僧として彼の中心は全南を出でざりき。道說傳は半島に於て地理讖緯説が佛敎に對して有せし勢力に比例して増大せり。李朝にありて彼の傳の甚しく附加添増せられしは地理讖緯説が高麗朝に於てよりも流行せしにはあらずして佛敎が衰頹せしに因るなり。

明治四十五年三月一日